

194. 平成3年度滋賀県下における

発掘調査の紹介 その2

13. 弥生時代後期の環濠(第6次調査)

守山市古高町 下長遺跡

平成3年8月に着手した下長遺跡第6次調査は民間の工場建築に伴う調査で、約1,000㎡を対象とした。調査地点は古高工業団地の東端で、これまでの調査から掘立柱建物を中心とする遺構が予想されていた。調査地の東半は耕作土下約20cmで遺構面が検出され、弥生時代末から古墳時代初頭の竪穴住居3棟、土坑などが検出された。竪穴住居は一辺6mの方形プランで、主柱穴4本、東壁下に土坑を配する構造である。また、古墳時代初頭の住居の周囲には径12～15mの細溝が囲繞している。掘立柱建物については1間×2間程度の小規模なものが多く、無数に切り合うため、その数は3棟以上ということしか言えない状況であった。西半部は次第に遺構面が低く傾斜し、遺構も少し希薄になる。この地点で幅2.5m、深さ1mの大溝が東西方向に延長約30m分検出された。堆積土の中間に炭化物の多い粘土層がみられ、この層の直上で一括性の高い土器群が多量に出土した。受口状口縁甕では口縁部外面に水平方向に近い列点文を施すもの、壺では退化長頸壺、受口状口縁鉢など服部遺跡の後期の環濠の出土遺物に並行する土器類である。この大溝の延長は古墳時代初頭の旧河道で分断されているが、西方約200mの地点で類似した規模と遺物を出土した溝が検出されているので、この溝に続くものと考えられる。

この大溝の西側は更に低く傾斜し、谷状の地形をつくり出しているが、幅10m程度で、その西は再び微高地をなし、多数の遺構が営まれている。これまでⅣ様式、庄内期の住居は確実であったが、今回の調査でⅤ様式の集落の存在も確実となった。

(守山市教育委員会 山崎 秀二)

14. 最古の「文書木簡」と弥生中期の木偶

中主町西河原 湯ノ部遺跡

中主町西河原と八夫地域の水田地帯に位置する湯ノ

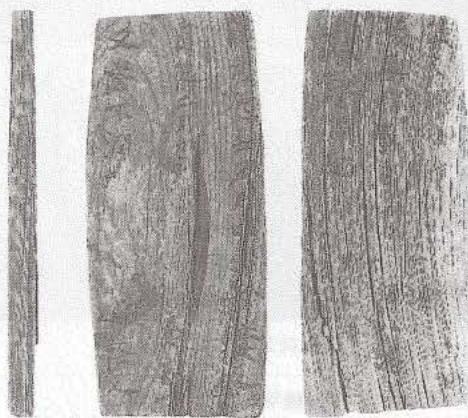
部遺跡では、7世紀末から8世紀初頭を中心とする官衙的集落跡と、弥生時代の住居跡・方形周溝墓群を中心とした、大きく二時期の遺構群が検出された。

7世紀末から8世紀初頭にかけての遺構面では、24トレンチで鍛冶関連の工房とみられる掘立柱建物や排滓土坑、焼土跡などが検出され、鉄滓、砥石、炭、フイゴの羽口、須恵器、土師器などの遺物が出土した。また、この遺跡群を西隅で区画する南北方向の溝から丙子年=天武5年(676)の年紀を記す我が国最古の文書木簡が出土した。

この文書木簡は「牒」ではじまり「謹牒也」で終る「公式令」の文書様式を用いたり、律令制度の「蔭位制」に関連すると思われる「蔭人」などの文字もみられ、律令時代の形成過程を考える上でも重要な意義を持つ木簡である。

また、下層の弥生時代の遺構面では、前期の竪穴住居跡が円形プランで壁溝を持って検出された。中期末では1辺20m弱の方形周溝墓が3基以上検出され、周溝から磨製石剣などが出土した。後期では方形プランの竪穴住居跡が1基のほか、一辺約7m前後の方形周溝墓が7基以上検出された。

このほか中～後期の環濠状の幅約5m、深さ約1mの溝が検出された。この環濠状遺溝は上層が後期末、下層が中期末で、溝の底面から4体の木偶が出土した。環濠状遺構の内側には前記2基の住居跡、外側には後



(背)

(表)

(裏)

期の方形周溝墓群がめぐっている。

4体の木偶はいずれも異なる形態を呈し、第4木偶は穿孔する穴に棒が入ったままで出土した。いずれも弥生時代の祭祀を考える上で貴重な遺物である。

(財滋賀県文化財保護協会 濱 修)

15. 文書木簡が出土

中主町西河原 西河原遺跡

西河原遺跡は、野洲川が形成した三角洲地帯の微高地上に立地する白鳳時代～江戸時代の複合遺跡である。

今回の調査は、個人住宅の建設に伴う事前調査で、285㎡を対象に平成3年11月から実施した。

調査の結果、白鳳時代～平安時代前半の掘立柱建物跡3棟と溝跡を検出した。溝跡は、幅4m以上、深さ1.2mの南北方向に延びるもので、岸には杭が数多く打ち込まれていた。遺物は、7世紀後半～9世紀前半の土師器、須恵器、墨書土器、木簡、曲物の底板、琴柱、斎串、桃の種、釘等が出土した。

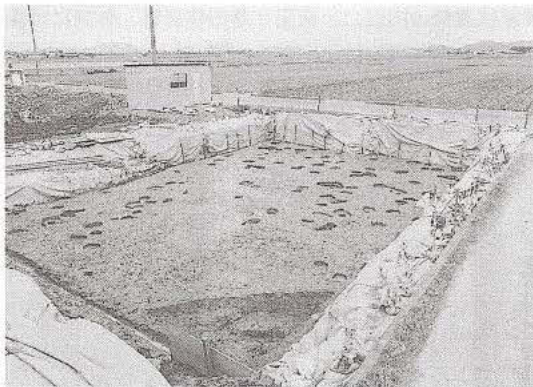
木簡は3点出土したが、文字が明瞭に読みとれたものは1点のみである。木簡の長さ145mm以上、幅34mm、厚さ5mmの大きさで、表裏に墨書されていた。以下、釈文を記す。

表「郡警符馬道里長令×」

裏「女丁 𠄎𠄎𠄎𠄎」

郡司が、里長宛に出した木簡で、郷里制を採用する(715年)以前のものと考えられる。

本遺跡から北へ300mの地点で13点の木簡が出土した西河原森ノ内遺跡があり、西河原遺跡の性格等についても、他遺跡との関連から総合的にみていく必要がある。 (中主町教育委員会 徳網 克己)



掘立柱建物跡と溝跡

16. 野洲川右岸沖積平野の後期古墳

中主町木部 木部天神前古墳

木部天神前古墳(旧中里村古墳)の立地は、野洲川

右岸下流域の沖積地にあり、現在では最も近い湖岸まで4km、大岩山山麓の中山道(東山道)まで3.5kmに位置するが、古墳の北側にはかつては内湖であったと考えられる後背湿地や旧河道が接しており、水運には極めて便利な所であったと推測される。

今回の調査は、木部天神前古墳が町内では唯一実見できる古墳であるため、遺跡の保護と生涯学習の場としての史蹟整備を目的として実施したものである。

当古墳は明治31年に石材採取を目的とした盗掘の他、その後も多くの改変を受けていたが、玄室下段や副葬品の一部が残るなど成果を得た。調査の結果明らかとなった点は、以下のとおりである。①墳丘は、直径約40mの円墳とみられるが、隣接地の県道調査の成果より、東側に20m余りの前方部をもつ、全長約60m余りの前方後円墳である可能性がある。②外部施設として葺石や埴輪列が存在した可能性が高い。③主体部の横穴式石室は、畿内に通有な縦長の長方形であるが左片袖式で、羨道部との境に闕石を設けるなど堅穴系横口式石室の影響下に作られた石室である。玄室は奥行4.3m×幅2.2m×残存高1.2m、羨道は残存長6.2m×幅約1.3m、復元される全長は17～18m、玄室高は2.5～3mと考えられ、石室入口部から玄室へ階段式に下がる構造であったと考えられる。なお玄室は、三上山を一望できる南側に開口している。使用されている石材は、比較的小型のものが多く、遺存する石材の全てと羨道・玄室床面の礫床の大部分が湖東流紋岩であった。また玄室内の壁面はベニガラで赤彩されていた。④出土遺物には、武器(鉄刀、鉄鏃)・装身具(碧玉製管玉、銀製耳環、黒漆塗土製小玉、水晶製切子玉)・馬具(鉄地金銅張製)・農工具(鉄製鋤先)・土器(有蓋蓋飾付脚付壺等)・鉄滓等がある。⑤古墳の築造時期(初葬)は、出土した土器や副葬品の年代から、古墳時代後期の6世紀中頃で、追葬の終了する時期は6世紀末～7世紀初頭と考えられた。

以上から木部天神前古墳が、県内でも大型の古墳に



羨道部から見た横穴式石室

横穴式石室を採用し始めた早い時期の古墳であると共に、優れた副葬品を出土した同時期の山津照神社古墳（近江町；前方後円墳・全長63m?）や鴨稻荷山古墳（高島町；前方後円墳・全長50m?）などと様相が極めて似通っていることが指摘されており、今後の出土遺物や墳丘調査の進展が待たれる。

（中主町教育委員会 辻 広志）

17. 吉祥寺古墳群の調査

こづつみ きつしやうじこふんぐん
野洲町小堤 吉祥寺古墳群

調査は、小堤土地改良区の団体営圃場整備に伴う調査で3基の古墳を発掘した。1号墳は、直径8mの円墳で、南口する横穴式石室であるが、用地外のため未調査である。2号墳は、南側に開口する幅1.8×長さ7.2mの無袖式横穴式石室が内部主体で、玄室は、後世に攪乱が著しく、須恵器・土師器・鉄刀・耳環が床面より10cm上に散乱した状態であった。しかし、29点の土器が実測でき、陶邑TK43型式に造墓時期を求めることが可能である。3号墳は、床面は保存できるため未調査であるが、幅1.6×長さ4.2m前後の無袖式横穴式石室である。石材は、すでに抜き取られたとみられ、多く基石を残すのみである。時期は、6世紀末～7世紀前半と考えられる。4号墳は、幅1.7～1.8m×長さ8.4mの長大な無袖式横穴式石室である。玄室の基石を残す程度であるが、石材が大振りで、床面に全体の3/5を埋めて据えている。また、石室内より、須恵器の装飾壺と杯が出土しており、陶邑TK209型式に比定できる。石室規模から推察すると、群内の盟主墳と考えられる。このように、2基について調査したが、保存状態が悪く、詳細は不明なものの、吉祥寺古墳群が、6世紀後葉～7世紀前半の無袖式横穴式石室を内部主体とする古墳群であることが判明した。特に、北100mの位置には、7世紀前半を中心とする小堤遺跡集落（報告済）が存在しており、同一時期のもので、注目される。いずれにせよ、群集墳が、等質的な規模・副葬品と云う、通有の理解が主流を占める群集墳研究の中、実態としては、中核墓の存在が認められる。この点が、今後、群構成の上で見失ってはならない視点と考えられる。

等質的とされる群集墳にも、階層制が存在しており、被葬者が全て有力家長層といった通説的理解について、今後、解明すべき重要な問題だと思われる。

（野洲町教育委員会 花田 勝広）

18. 横穴式石室副葬品に初期文字資料

こしのはら さくらばさま
野洲町小篠原 桜生古墳群

桜生古墳群は、三上山から北に続く丘陵のひとつである田中山の北西麓、細谷山と大岩山の山麓部に位置



へら書き須恵器

する。総数16基の古墳群で、径約10～20m前後の中規模クラスの円墳からなる。

この古墳群の北側にはこの地域の首長層代々の墳墓とされる大岩山古墳群が、南側には小規模円墳からなる福林寺古墳群や田中山古墳群があり、後期古墳群のあり方にその被葬者集団相の違いを伺うことができる。

発掘調査を行ったのは第7号墳で、径約14m・高さ約4mの規模をもつ円墳、横穴式石室を内部主体にもつ。横穴式石室は左片袖式で、全長約8.9m、玄室長約4.4m・幅約2.0mを測る。

出土した遺物は、古墳の築造過程に伴うものと、石室内への副葬品、平安～鎌倉期の土器類に大別することができる。古墳の築造過程に伴うものは、墳丘盛土の基底部付近から出土しており6世紀後葉という築造時期を推定させるものである。副葬品は、その大半が石室外に廃棄された状態で出土している。7世紀前半の土器類が多数みられ、へら書き文字を刻した須恵器の短頸壺もこれらと共に出土している。

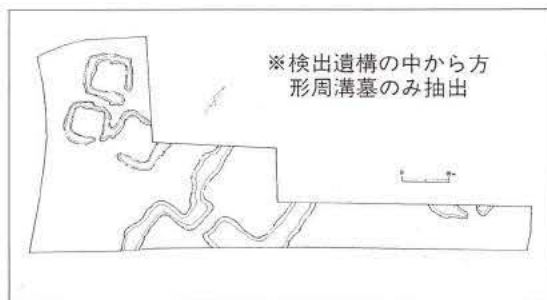
へら書き文字は短頸壺の体部中程に刻まれており、「此者□□首□□」と解読される。5文字目の「首」は「おびと」と読み氏姓制度の姓とみられ、「此者」以下には人名が記されていると考えられる。氏姓制度の地方への浸透や大和政権と地方氏族との関係、古墳の墳形・規模と古墳被葬者の身分・階層性との関係など、多くの検討課題を提供する貴重な資料であるといえる。

（叻滋賀県文化財保護協会 大崎 哲人）

19. 大型方形周溝墓と中世集落を検出

くのべ
野洲町久野部 久野部遺跡

野洲町教育委員会では、昨年2月より宅地造成に先立って久野部遺跡の発掘調査を実施している。調査地は湖南消防組合東消防署に隣接する位置で、現在の行政区では大字久野部に属するが、遺跡の立地は、むしろ富波遺跡の一角に含まれる。調査申請地約2,800㎡



弥生時代遺構配置図

の全域を調査したところ、弥生時代と平安時代末期の二時期からなる遺構群を検出した。このうち弥生時代の遺構は、方形周溝墓で、合計6基が調査区内で検出された。とくに調査区中央で検出された方形周溝墓は、対辺する周溝間の心々距離が18m前後もある大型のもので、さらに南側に陸橋部によって接合された同規模の方形周溝墓が一基連結されている。一方大型方形周溝墓の西側に隣接する方形周溝墓群は小型の規模のもので、3基が近接して検出されている。これらの周溝墓群の時期を示す遺物は少ないが、概ね弥生時代中期後半頃の土器の破片が周溝内より出土している。また、中世集落関係の遺構も多量に検出されている。これらの遺構群には掘立柱建物(10棟以上)、柵列、井戸、土壇墓、柱穴群、土坑群、条里溝等が認められる。建物は数次の建替えが認められ、また規模も相対的に大きいものが多い。また井戸も6基が検出されており、内1基より多量の遺物が出土している。出土遺物は現在整理中であるが、土師器、黒色土器、中国陶磁、山茶碗、東播系須恵器などが認められる。これらの出土遺物はほぼ12世紀代におさまる時期のもので、建物群が長期にわたって存続する様相は認められない。とくに本調査地の建物群は、東消防署敷地内の大規模建物群や、昭和52年に県教委が調査された七ノ坪B地区の遺構群に時期や内容が対応するもので、合計する調査面積も、他調査地を含めて10,000万㎡を超えていることから、中世富波荘の成立を考えていく上で、良好な調査例となることが予想される。

(野洲町教育委員会 森 隆)

20. 祭祀遺物を含む廃棄土坑を発見

近江八幡市加茂町 加茂遺跡

加茂遺跡では、土坑内より祭祀に使用されたと思われる木製品2点が発見された。

土坑の平面形は、1.4m×0.95mの楕円形で、断面は船底形を呈し、深さは0.75mを測る。木製品はこの土坑の下方より出土した。この木製品は、高坏の脚部と脚付きの槽で、脚付きの槽は脚部が上になった状態で検出された。脚付きの槽の脚部には長方形のすかし窓が

各2ヵ所あけられている。出土状態から考えて、これらの遺物は土坑内に一括投棄されたものと推測される。なお、木製品と同じ層中で、種子などの植物遺体が確認された。

この土坑は、自然流路の肩口で検出されたものであるが、自然流路中より布留式併行の土器が出土していることから、土坑は少なくともこれらの土器以前に埋められたものと考えられる。

今回の調査地は、面積も狭く、他に目立った遺構は確認されなかった。しかし、自然流路の肩部から壺・甕・高坏などの布留式併行期の土器が多数検出されている。こうした状況から、おそらく同期の集落が近隣に所在するものと考えられる。

(近江八幡市教育委員会 島田 栄治)

21. 「特殊土坑」を発見

近江八幡市^{でまち}出町 出町遺跡

出町遺跡は、弥生時代中期・古墳時代前期の掘立柱建物のみによって構成される集落であることが確認されている。今次の調査は、遺跡の西端で実施され、古墳時代前期の掘立柱建物・土坑・溝・自然流路が確認された。

土坑の平面形は、約1.25m×1.5mの楕円形で、深さ約0.9mを測る。断面形は袋状で、深さ0.5mのところまで直径約0.65~0.85m、深さ0.7~0.8mのところまで直径約1.05~1.2mとなる。出土遺物は、古墳時代前期の土師器(甕・壺)と土製支脚で、低部に集積して発見された。

この遺構の性格は現在のところ不明であるが、形状を考慮するなら貯蔵穴とも考えられる。しかし、この土坑は粘土の遺構面を掘り込み、最下部では一部砂層に達しており、調査時にも僅かながら湧水があった。一夜おくと低部に水が溜っていたほどで、当時も湧水量が多かったことが推定される。こうした点から考えると貯蔵穴とは考えがたい。

また、形状から見て井戸とすることにも疑問が残る。ここではとりあえず「特殊土坑」と呼称し、性格についての検討は今後の課題としたい。

なお、この土坑の北方に、2×2間の掘立柱建物2棟(3.2×3.5m・3.2×3.2m)が並び建てて発見された。おそらく、土坑と建物は一連の施設であったと考えられるが、他にこれらに切り合う別時期の遺構がほとんどなく、建物配置や関連施設のあり様を考える上で貴重な事例となるものである。

(近江八幡市教育委員会 佐竹 章吾)

22. 2基のカマドが併設された竪穴建物

近江八幡市長田町 後川遺跡

後川遺跡はこれまでの調査で、縄文・古墳時代・中世・近世の遺構・遺物が確認されている。今次の調査では、7世紀初頭の竪穴住居に、2基の造り付けのカマドが併設されて確認された。竪穴建物の平面形は、長辺5.4m、短辺4.4mの長方形プランを呈する。竪穴住居の主軸は、ほぼ南北方向をとる。

2基の造り付けのカマドは、竪穴住居の東側の壁に付設されていた。内1基は、この東壁の中央に位置し、もう1基はその南側に造り付けられていた。

両カマドとも、天井部は崩落する。残存する平面形はともに馬蹄形を呈する。規模もほぼ同じで、幅1m長さ1.2mを測る。なお、2基ともに淡黄褐色の粘土を用いて構築されている。

また、南壁に沿って幅1.8mの高床部(以後ベットと称する)を設ける。なおこのベットは、地山を掘り残したものである。さらに、先の南側のカマドは、このベット上に付設されるために、北側のそれに比べ残存高も低く、当然のことながら高位に位置する。一方、柱穴については判然としなかったが、4箇所が推定された。以上が当住居の概要であるが、1)2基のカマドを付設すること。2)ベットを有すること等を考慮するなら、当建物の居住者の性格は非一般的であると想定される。

なお、現在調査中であるが、少なくとも県下においては、2基のカマドを有する竪穴建物は確認されていない。

ところで、5次調査における当該期の遺構としては幅2m、深さ0.7mの溝と、小型の竪穴建物が1基確認されている。

(近江八幡市教育委員会 岩崎 直也)

23. 大手道と伝前田利家邸跡の調査

安土町下豊浦 特別史跡安土城跡

特別史跡安土城跡の歴史性を明らかにし、その成果を正しく後世に伝えると共に環境整備を実施する基礎資料を得るための発掘調査の3年目を迎えた今年度は、山腹から黒金門に至る大手道・大手門推定地・伝前田利家邸跡の約6,000㎡を対象地として実施した。

大手道は、前年度までに山裾から山腹まで直線的に約106m北進した後、直角に折れて約30m西進することが判明していたが、今回の調査により伝武井夕庵邸跡周辺から伝織田信忠邸跡前までは七曲り状に屈曲して延びることが確認された。この部分は、石段が標高にあわせて扇状に展開すること、石塁・排水路が部分的にしか伴わないこと等から、直線部分とは築造手法が



黒金門下の石垣と通路

異なると考えられる。黒金門付近では、現道の南側に築城当時の石垣を検出し、大手道が南西から取り付くことが判明した。また、その南に一段下がって主郭の外周を巡る通路があり、斜面に極めて短期間に投棄された多量の瓦類をて検出した。金箔瓦を含む軒・平瓦類の他に、桐文の鬼瓦・獣を表現した瓦片・菊花文のある鳥龕等の役瓦や堆積状態から、黒金門に葺かれていた瓦であると想定される。

大手門推定地では、大手門は確認できなかったが、現道の両側に石塁・排水路・石段が残存していることが確認され、幅約8.5mの大手道が更に南に延び、直線部分の延長は131m以上になることが判明した。

伝前田利家邸跡は、昨年度の調査地の東側に位置する3つの郭と郭内の石段を調査した。最も広い郭では、構造・性格の異なる建物が少なくとも3棟以上、最下段の郭では1棟の建物を検出した。これらについては、土器や鉄器類の出土地の検討が、各々の性格を考える上で重要な手がかりになると考えられる。また、東西両端に位置する石段によって各郭が表と裏で連結していることが判明したことから、昨年度の調査成果と合せると、大手道を狭んで対象的に位置する伝羽柴秀吉邸跡と同様に、少なくとも5つの郭によって1つの屋敷地が構成されていることが確認できた。

以上の様に、城の背骨とも言える大手道のルートおよび構造を、ほぼ把握することができ、更に1つの屋敷地の全容がほぼ明らかになったことにより、今後の調査に対して1つの指針を与えると共に、比較対象し得る資料を得ることができたとと言える。

(滋賀県教育委員会 小竹森直子)

24. 中世に破壊された群集墳

能登川町猪子 長福寺遺跡

長福寺遺跡は神崎郡能登川町猪子にあり、5,000㎡に及ぶ調査実施区域からは、6世紀中頃の群集墳11基、10世紀頃の掘立柱建物5棟、14世紀の集落跡が検出された。

群集墳とした遺構は、幅2m深さ数10m程度の溝が円形に巡るものである。11基中8基の全周が知れており、最も規模の大きいものは直径19mを測る。どの円形溝も互いに切り合うことはない。出土遺物の大半は須恵器で、坏蓋・壺・甕・高坏・甕などの器種がみられる。ほかには赤色顔料（ベンガラ）が出土した。須恵器の年代観および先の切り合い関係から、11基とも短期間のうちに構築されたことがわかる一方、この遺構検出地のすぐ南には多数の群集墳が存在しており、このような状況から検出遺構が円墳の周溝であると判断した。

全周をほぼ確認している8基のうち5基から、周溝で区画された内側に大小の石材をぎっしり埋めた土坑が発見された。その形態は方形のものが多いが、三角形に近い形のものもあった。また規模も一辺1mに満たないものから、4m程度のものであり、全体的に規格性はあまり感じられなかった。また、石材の配置になんら規則性がみられないこと、出土する遺物のほとんどが古墳とほぼ同じ時期の須恵器であること、そしてその須恵器が石材にはさまれた状態で出土し、完形近くまで復元できることなどから、この遺構は古墳を破壊した際、石材を廃棄したものと考えている。現に古墳と重複して中世の集落跡が検出されているのであるから、この時期までに古墳は破壊されたはずであり、土坑出土遺物の新しい時期と集落跡出土の遺物の年代とも矛盾はない。おそらく6世紀中頃に造営された古墳群は14世紀ごろ破壊されてしまったようである。

(能登川町教育委員会 山本 一博)



古墳とそれを切り込む中世遺構群

25. 縄文時代の丸木舟未製品出土

彦根市松原町 まつばらないこ 松原内湖遺跡

当遺跡は、旧松原内湖に面した湖岸及び低湿地にある縄文時代から江戸時代に及ぶ複合遺跡であり、本調査は琵琶湖流域下水道東北部浄化センター建設に伴う第7次調査である。



丸木舟未製品出土状況

縄文時代の成果としては、これまで旧内湖の汀線沿いに竪穴住居・土壙墓・ピットなどが検出され、多量の土器が出土している。後期から晩期の多量の土器に伴い、丸木舟・竪櫂・ヘラ状木製品・石器などが確認されている。

今年度の調査でも旧内湖沿いに後期後葉の遺物包含層（砂混じりの茶褐色スクモ層）の堆積が確認され、土器（深鉢・浅鉢）とともに丸木舟とその未製品・櫂・漆塗り弓が出土している。

丸木舟は一端を一部欠くが、残存長548cm、幅45～48cm、厚さ2～4cmをはかり、内面の掘り込みは10cm前後で実際に人が乗れたのかと疑問視をされるほどの浅さである。中央部を中心に数個所の焦げ跡が認められ、樹種はスギである。

未製品は丸木舟と同一層中から隣接して出土し、全長492cm、直径60～72cmの丸太材で表面の樹皮をはいだままの状態であるが、一端を長さ175cm、深さ35cmの範囲でくり抜かれている。くり抜かれた部分には広範囲に焦げ跡が残り、当時の加工技術をかいまみることができる。ただ、触先にあたる部分がくり抜かれていると、樹種が堅くて重いヤマザクラ（これまではスギが多い）であることから未製品とは考えにくい要素も指摘できる。

また、全体に黒漆を塗布し、4ヵ所に糸状繊維を巻きつけ赤漆で固めた漆塗り弓（全長158cm）も出土している。

これらは縄文時代の数少ない木製品の貴重な資料であり、内湖の周辺で繰り広げられた当時の生活をかいまみることのできる産物としても重要である。

(朝滋賀県文化財保護協会 吉田 秀則)